

図書館だより

1994. 10. 8

第16巻3号

通巻131号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

「心の旅路」の四季 故田中修前学長の三回忌によせて

柴田義人

一昨年(1992年)9月29日、田中修前学長が急逝された。田中修教授のお人柄・学問的な業績・教育行政上の功勞などについては、昨年12月故田中修教授追悼号として編集された、本学『経済論集』の「追悼のことは」(秋葉国利経済学部長)や、4年前、田中修教授の還暦を記念した『経済論集』の「還暦を祝して」(海保幸世経済学部長)に詳しいので、在りし日を偲んでいただきたい。

ここでは、私より1カ月早くこの世に生をうけ、北海学園では5年先輩になる彼を、「田中さん」といつものように呼びすることにしたい。

田中さんは、1986年(昭和61年)、学長職に就いて多忙な中で、『日本資本主義と北海道』を出版され、経済学博士の学位を授与された。その「あとがき」で謝辞を北海道大学時代のゼミの恩師山口和雄先生と「今は亡き」奥山亮先生に捧げ、次のように綴られている。「奥山先生には1950年以来学生時代のいろいろな研究会で懇切な御助言を受け、さらにその後先生の強い示唆によって北海道史研究に誘われることになった」。実は私も奥山先生には、戦前、樺太庁立真岡中学校の担任教諭としての先生に、大変お世話になり、戦後、札幌工業高校教諭になられてからも、先生を中心に同期会誌『白樺』をつくり、連載された先生の「歴史に興味ある人々へ」に啓発されたりもした。クラスメートの友情の絆となった『白樺』も、戦後混乱期における精神的役割を果たしたかのように、1951年(昭和26年)、第8号をもって休刊となった。

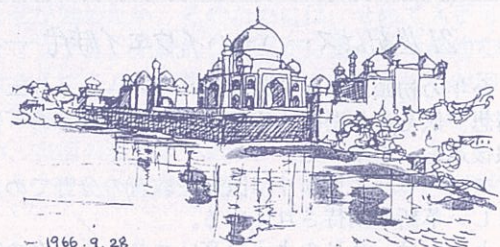
奥山亮先生は、『新考北海道史』を1950年(昭和25年)に上梓されたが、田中さんの文章をそのまま再現すると、「戦前の研究が持つ方法上の問題を徹底的に批判するとともに、戦前の蓄積に拠り

つつ新たな方法にもとづいて北海道の歴史を再構成する作業」の「記念碑的労作」であった。奥山先生と田中さんの出会いは恐らくこの頃のことであったと思われる。

ところで、田中さんが亡くなる前日、私と研究室がすぐ隣りなので、ゼミの始まる前のひととき、お会いして、私は「今日は26年前にタジ・マハールに行っていた日です」といって、本学『開発論集』第14号(1972年11月)を開いてお見せしたのだった。私はタジ・マハールのスケッチに添えて、「タージを見て死ぬ、という。しかし、タジ・マハールには、死を誘う静寂はない。むしろ生の安らかな憩いがある。」と書き残している。河合隼雄京都大学教授(臨床心理学)は、『生きるための死に方』(新潮文庫、平成4年4月)に、次のように寄稿されている。「簡単に既成の宗教に頼ったり、修行に専念したりできぬ人間は、ともかく、今、この生を十分に生きることを通して、死後の生命についてのファンタジーが、己のなかから湧きでてくるのを待つべきであろう。」

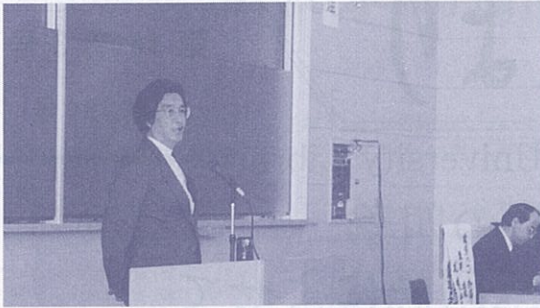
田中さん、安らかにお休み下さい。今はひたすら、奥様はじめご家族の平安を心からお祈りいたします。(1994.9.5)

(しばた よしと 経済学部教授)



- 1966.9.28

『第37回(平成6年度)北海道地区大学図書館職員研究集会』の開催



図書館長 米森文嗣教授

長い名前の集会在7月29日日本学60番教室を会場に行われました。北海道にある4年制国・公・私立大学に勤務する図書館職員が年1回集まって講演や仲間の研究発表を聞き、図書館運営に役立っているのが目的です。どのような内容になるかは、札幌及び近郊にある大学図書館から1名ずつ選出される企画委員会の方針によります。今年は「外国と比較した日本の裁判制度」と題し札幌学院大学教授渡部保夫氏が日本のような職業裁判制度と比較した、アメリカ・イギリス・オランダ・ドイツ各国の裁判制度を話され、日本の裁判制度の問題点を指摘されました。その他講演は、北海道史研究協議会副会長谷澤尚一氏による「図書館・文書館との狭間—北方資料を中心に—」。酪農学園大学講師福田都代氏による「図書館と国際援助」の2本です。又図書館員が現場の問題とどのように取り組んでいるかを披露する研究発表が2本ありました。北海道大学附属図書館田中健太郎氏「カレントコンテンツ マルチ検索システムについて」スライドを用いて、北海道大学図書館のコンピュータ端末を使ったカレント・コンテンツサービスの実態です。もうひとつは酪農学園大学附属図書館事務長浦川利幸氏より「大学図書館の電算

化について—機械化アンケートから—」と題し道内各大学図書館機械化の進捗状況が発表されました。猛暑の中146名の参加がありました。この研究集会の内容は録音テープからまとめられて記録誌となって残ります。興味をお持ちの方は図書館でお読み下さい。

第37回(平成6年度)北海道地区大学図書館職員研究集会プログラム

日時：平成6年7月29日(金) 10:00~16:30
 会場：北海学園大学 60番教室 (5号館6階)
 司会：(午前) 北海道大学 岡田 潔
 (午後) 札幌医科大学 尾上 祐子
 北海道情報大学 大屋 郁保子

9:30~10:00	受付
10:00~10:10	開会のことば(企画委員長=田鎖英晴) 当番館挨拶 北海学園大学附属図書館長 米森文嗣
10:10~11:10	講演「外国と比較した日本の裁判制度」 札幌学院大学教授 渡部保夫氏
11:10~12:10	講演「図書館・文書館との狭間—北方資料を中心に—」 北海道史研究協議会 副会長 谷澤尚一氏
12:10~12:20	当番館からの案内
12:20~13:30	昼食・休憩(図書館等自由見学)
13:30~14:10	発表1「カレントコンテンツ マルチ検索システムについて」 北海道大学附属図書館 田中健太郎
14:10~15:10	発表2「大学図書館の電算化について—機械化アンケートから—」 酪農学園大学附属図書館 浦川利幸
15:10~15:25	休憩(15分)
15:25~16:25	講演「図書館と国際援助」 北海道情報大学講師 福田都代氏
16:25~16:30	閉会のことば(企画委員長=田鎖英晴)

—21世紀はスーパーハイウェイ時代—

今年の初頭、アメリカからスーパーハイウェイ構想が伝えられた時、専門家は一様に日本の「情報後進国」を嘆いた。

スーパーハイウェイは医療や教育の分野でめざましい革新が期待されている。

とりわけ、今日のような高いコストの教育の時

代にあっては。

平均的な家庭で大学生への仕送りは月16万円とか。それに、デフレ時代に入って雇用の面でも不安である。日経連会長は6,000万人の雇用を2,000万人削って4,000万人にすると豪語した。

居ながらにして、スイッチ一つで望みのカリキュラムメニューを選択すれば親たちの負担は軽くなる。ケンブリッジの講義も聴けるだろう。

映画100年と映像ライブラリー

竹岡 和田男

1995年、映画は誕生100年を迎える。「動く写真」への試みは19世紀前半から各国で進められてきたが、初の映写方式によるシネマトグラフを発明したフランスのリュミエール兄弟が、パリでいまと近い形、つまり入場料をとって人を集め、上映したのが1895年12月28日のことであった。

この100年、映画は技術と表現の革新を重ねて、アッという間に20世紀を代表する文化としての地位を築き、やがてテレビ、ビデオを経て最新のメカによる情報社会に連なる映像時代を現出させることになる。もう現代生活にとって欠かせぬものとなった映像だが、どんな人、どんな試みの積み重ねが今日を招いているか、とくに長くその基幹となっていた映画について足跡をたどりたいたいというのが、私の主題の一つであって来た。

リュミエールやエジソンが現実の情景を動かし、メリエスが「月世界旅行」でフィクションを作り、チャップリンの喜劇が内容を深め、グリフィスの「イントレランス」やエイゼンシュテインの「戦艦ポチョムキン」が表現の文法を広げて行く……。これにカメラやフィルムの改良、音や色加わるといふ道のりは、それぞれがドラマチックであって、仮にわが身をその時代に置いてみたときに、ある興奮を覚えてしまう。例えばリュミエールが撮った駅の風景で、列車が遠くからホームに入ってくると、観客が我が争って出口に逃げたなどというの、笑い話には思えない。

映画は昔に比べて力を失ったという。確かに1958年に日本で年間11億の観客を動員した映画が、いまは1億5千万に落ちたという現実はある。しかしそれは劇場や映画産業のことであって、テレビやビデオを通しての存在を考えると、映画を愛する人は決して減っていない。それは、いま書店での映画の本の氾濫を見てもわかる。ただ、映画はあくまで画面で語るものであって、いくら活字を読み、話を聞いても真の理解にはほど遠い。だから、この100年の代表作くらいは、容易に実物を見ることができ、そんな状況が欲しいのだが映画館やレンタルビデオにはとても望めない。

とくに悲しいのは日本映画の古い名作にいい状態で接することが難しいことである。伊藤大輔、

伊丹万作、山中貞雄、溝口健二、内田吐夢、小津安二郎らは、1920年代から30年代にかけて日本映画を一つの完成期に導いた作家たちだが、そのころの作品で完全な状態で残されているものは極めて少ない。欠落していたり、部分だけだったりするのはいい方で、全く消滅している名作がたくさんある。溝口の1936年作「浪華悲歌」と「祇園の姉妹」は、日本映画のリアリズムを確立された重要な作品なのだが、日本では一般に見ることができず、ビデオをアメリカからとり寄せて、やっご対面という不思議なことにも突き当たる。

そう言えば、アメリカでは映画の保存に細かい神経を遣っている。美術館でのフィルム保存はもちろんだが、市販のビデオを見てもサイレント時代からの名作がほとんど洩れなく、傷ひとつない画面でコピーされているのに驚く。つまり映画を文化として考えてきた国と、消耗品としてしか考えなかった国の違いなのであろう。

映画はスクリーンの上だけでなく、その時代や思潮を見る窓としても大きな意味を持つ。例えば、日本的な静謐の世界で知られる小津安二郎の作品でも、戦前、サイレント時代のコメディや風俗劇は、いかにもアメリカ映画の影響を多く受けた跡を見せて、バタ臭い、大正以来のモダニズムをそのまま表している。また1920年代から襲った不況は、直接小津映画の内容にも影響して、庶民の悲哀を浮かばせてきた。溝口健二が前記の二作でリアルに作家精神を燃焼させたのも、自由への弾圧が激化する1930年代半ばのことであってこそ、さらに輝きを増すのである。

若い人には、いまの派手な宣伝に乗る新作を見るだけでなく、かつて映画表現の基礎を作ってきた人たちの情熱を、その背景と共に汲み取ることがぜひ勧めたい。そのためには、せめて入手可能なソフトを、系統的な視点から集めた本格的な映像ライブラリーが学内に設けられ、みんなが図書と同様に利用できるようなになれば、と思う。それが、当面の私の夢である。

(たけおか わだお 人文学部教授)

- アメリカの墮落 中東政策をめぐる野心と嫉妬 ハワード・タイシャー著 1993
- 日本崩落 この大不況は陰謀である 宇野正美著 1994
- 市民社会とレギュレーション 平田清明著 1993
- 状態区間モデルの経済学への応用 谷崎久志著 1993
- 経済学は自然をどうとらえてきたか ハンス・イムラー著 1993
- 品質とは何か 品質論における新しいパラダイムの創出と展開を目指して 三谷茂著 1993
- 概観日本社会経済史 斉藤博著 1992
- イギリス経済社会政策史 ロイドジョージからサッチャーまで G.C. ピーデン著 1990
- 中小企業政策の形成過程の研究 渡辺俊三著 1992
- 日本を動かすのは五島昇か堤義明か 「財界本流」と「政界本流」の仁義なき戦い 宿命のライバル 永川幸樹著 1986
- グローバル企業の地域統括戦略—シンガポールの日系企業の財務戦略を中心に— 中垣昇著 1993
- 日本の系列と企業グループ その歴史と理論 下谷政弘著 1993
- 公益企業の料金理論 S.J. ブラウン著 1993
- 管理会計の基礎理論 辻厚生編著 1985
- 管理会計論 企業予算と直接原価計算 津曲直躬著 1977
- 管理会計論 内田昌利著 1985
- 日本の企業金融システムと国際競争 日本型資本主義対アメリカ型資本主義 井手正介著 1994
- 管理会計技法 伊藤善朗著 1992
- 管理会計の世紀 伊藤博著 1992
- 管理会計入門 増補版 西沢脩著 1989
- 管理会計 櫻井通晴著 1990
- 管理会計の動向 末石直久編著 1988
- 市場と財務の相互作用論 一般均衡理論とドイツ経営経済学 菊沢研宗著 1992
- 会計学一般教程 第2版 武田隆二著 1991
- バブルの経済学 日本経済に何が起こったのか 野口悠紀雄著 1992
- 開放下における韓国の金融システム 資本輸出国への道 鈴木満直著 1993
- 信託実務用語辞典 信託協会編 1992
- 地価税の理論と計算 美並義人著 1992
- イギリスの地方財政改革 門間董吉著 1993
- 現代労働力の雇用構造・階層構造の統計的研究 関西大学経済政治研究所大阪問題研究版編 1993
- 組織民主主義論 奥田幸助著 1992
- 激突 トヨタ、GM、VWの熾烈な闘い マリアン・ケラー著 1994
- 地域経済活性化の諸問題 関西大学経済政治研究所地域経済活性化研究班編 1993



気楽に読もう

「寅さん大全」

井上ひさし

本を紹介する、というよりは映画のすすめのような感じになりますが、日本映画の名作「男はつらいよ」の第1作～45作までをデータベース化した本、「寅さん大全」を紹介します。内容は45作分の映画ポスター、あらすじから始まり、寅さんの人生、旅路、恋路、そして「とらや」をとりまく人間模様などを興味をもって読めるように井上ひさしが監修しています。特に恋に関する分析は

するどいものがあり、高島易断による恋の相手の鑑定などは映画を見てから読むと非常におもしろいと思います。劇場まで行かなくても家でビデオが楽しめるようになった今、「男はつらいよ」を鑑賞し、この「寅さん大全」を読んでみてはいかがでしょうか。10作以上見ていれば本の内容は理解できると思いますし、45作ほとんど見た人には、いままでの内容を整理したり、懐かしい場面を思い出すのに必読の一冊です。

また、本とは関係ありませんが「男はつらいよ」で使用されたクラシック曲を編集したCDも販売されていますので、合わせて聴いてみてはいかがでしょうか。(Y.K)

レコードと法—日本レコード協会寄付講座1992年度—
 青山学院大学法学部 [編] 1993
 Copyright Law of Japan Y. Oyama [ほか] 著 1993
 国家と文明システム 木村雅昭著 1993
 西洋近現代史研究入門 望田幸男 [ほか] 編 1993
 アメリカにおける広域行政と政府間関係 村上芳夫著
 1993
 対立と共存の国際理論 国民国家体系のゆくえ 山影進著
 1994
 近現代日本の平和思想 平和憲法の思想的源流と発展 田
 畑忍編著 1993
 法律用語対訳集 ロシア語編 法務省刑事局外国法令研
 究会編 1993
 中世の罪と罰 網野善彦 [ほか] 著 1983
 ゲルマン法の虚像と実像 ドイツ法史の新しい道 K. ク
 レッシュェル [著] 1989
 憲法政策論 小林直樹著 1991
 現代立憲主義の展開 芦部信喜先生古稀祝賀 上 樋口
 陽一編 1993
 アイヌ肖像権裁判・全記録 現代企画室編集部編 1989
 教材憲法判例 中村睦男 [ほか] 編著 1990
 論点憲法教室 中村睦男著 1990
 行政法の解釈 阿部泰隆著 1990
 判例解説 行政法編 1～4 林修三著 1990
 行政法の視点と論点 行政法特別講義 和田英夫著 1983
 行政手続法の解説 平成5年法 青木康著 1993
 近代法治国家の行政法学 ヴァルター・イエリネック行政

法学の研究 人見剛著 1993
 現代民法学の展開 加藤雅信著 1993
 債権総論 新関輝夫著 1992
 債権各論 山口純夫編 1992
 近世私法史要論 H. シュロッサー著 1993
 リーガルマインド会社法 弥永真生著 1993
 死刑廃止論 団藤重光著 第3版 1993
 行刑の理論 吉田敏雄著 1987
 エキサイティング民事訴訟法 井上治典編 1993
 民事訴訟法における既判力の研究 坂原正夫著 1993
 刑事裁判と知る権利 中村泰次 [ほか] 著 1994
 現代国際法講義 杉原高嶺 [ほか] 著 1992
 世界のしくみ全系列地図 一国の論理と世界のシステム
 1993
 アメリカの雇用と法 在米日本弁護士から進出日本企業へ
 の報告 竹内規浩著 1993
 国際租税法 宮武敏夫著 1993
 多国籍企業税法 移転価格の法理 木村弘之亮著 1993
 外国人労働者の人権 行財政総合研究所編 1990
 バイオ裁判 バイオ時代の人権と予研裁判 芝田進午編
 1993



気楽に読もう

「医療ソーシャルワーカー日記」

長島喜一著 あけび書房

「医療ソーシャルワーカー、あまり耳にしない職業ですね。だいたい丈夫なだけが取り柄の私が病気のことや、医療問題に無知なのはしかたがないさ。」などと思ひながら手にした本でしたが、気が付いたらティッシュの箱を抱えながら一気に読み終わっていました。本書は著者が20数年間の医療ソーシャルワーカーとしての仕事を通して出会ったケースを、具体的に紹介しながら日本の医療現

場の現状をうきぼりにしています。いい病院とは？ いい医療とは？ とくに重い慢性病や末期ガンで長期入院をやむなくさせられた場合、治療技術の善し悪しもさることながら、「信頼感」とか「やさしさ」とか「安らぎ」といった精神的側面のほうがより重要な気がします。高齢化社会に向かい、医療保障や福祉の問題と難問の多いなか、医療ソーシャルワーカーの仕事の大切さを痛感しました。この本をきっかけに、医療問題に無知なのはいけないことだと気が付きました。明日は我が身。今は元気でも人間いつ病気になるかわからないですから。

(T.M)

ビジネス・コミュニケーション 村中順一著 1993
 落語の言語学 野村雅昭著 1994
 ファーガスンとスコットランド啓蒙 天羽康夫著 1993
 教師のための100の名言 皇至道著 1979
 世界シンボル辞典 J.C.クーパー著 1992
 イエスのミステリー 死海文書で謎を解く バーバラ・スィーリング著 1993
 日本にきた最初のイギリス人 ウィリアム・アダムズ=三浦按針 P.G.ロジャーズ [著] 1993
 日本よ、何処へ行くのか 江藤淳著 1991
 日本の進路を問う 長谷川慶太郎著 1993
 知的対決の方法 逆発想術対話篇 竹村健一著 1979
 統計学入門 鈴木輝雄著 1978
 まちがいだらけの漢方薬選び 漢方式みたてによる正しい使い方 関口善太 [ほか] 著
 都市と色彩 魅力ある環境づくりをめざして 吉田慎悟著 1994
 ウィーン世紀末の文化 木村直司編 1993
 ヴァン・ゴッホの生涯 フランク・エルガー著 1993
 大東亜戦争と日本映画 立見の戦中映画論 桜本富雄著 1993
 記号の事典 セレクト版 江川清[ほか]編 第2版 1991
 日本語と外国語の高低アクセントの構造 今津藤一著 1993
 アセアン諸国の言語政策 藤田剛正著 1993
 ブルーワー英語故事成語大辞典 E.C.ブルーワー著 1994

カナ発音西和小辞典 瓜谷良平 [ほか] 編 1993
 論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順 ウンベルト・エコ著 1991
 フィギュール ジェラルド・ジュネット著 1993
 探書遍歴 封印された戦時下文学の発掘 桜本富雄著 1994
 グリム〈初版〉を読む 吉原高志編著 1993
 人魔の運命 古田武彦著 1994
 ムアン・ブアンの姉妹 S.ブッパーヌウォング著 1993
 主題と方法—イギリスとアメリカの文学を読む— 平善久編 1994
 ピアス研究 生と死の狭間に 内田蓉子著 1994
 劇場人シェイクスピア ドキュメンタリー・ライフの試み 安西徹雄著 1994
 イタリア旅日記 ローマ、ナポリ、フィレンツェ (1826) 2 スタンダール [著] 1992
 日独対照生活会話ノート 角田実著 1993
 日英略語・略称辞典 プレム・モトワニ著 1993
 ワーズ・ワード 絵でひく英和大図鑑 ジャン=クロード・コンペイユ著 1993



気楽に読もう

マンガ版 自動車事故ものがたり

大蔵省印刷局 [編]

ジェイムス・ディーン、ビートたけし。この名前を見てあなたは何を連想しますか。

ピンポン! そう交通事故です。

最近では、事故と聞いても何も感じないほどに当たり前前の事になってしまいました。でも、もし自分の身に起きてしまったら……。そんなとき慌てないために是非読んでいただきたいのがこの本です。かの大蔵省から出ているだけあって中身は◎。

実際にあった事故7件を取り上げ、事故の原因から被害者、加害者、それぞれの家族の心の葛藤や心労、交通事故裁判の難しさなどが丁寧にリアルに描かれています。また終わりには相談所の電話番号や、弁護士に依頼する場合、しない場合のことまで親切に書いてあります。免許を持っている人、これから取ろうとしている人、乗せてもらうのが一番という人にも一読の価値あります。事故の恐ろしさを頭に叩き込んだら、さあ、車で、バイクで、楽しいドライブへ Let's Go!

(A.N)

CASE 概説 コンピュータ支援ソフトウェア・エンジニアリング 竹下亨著 1990

私の正論 堂垣内尚弘著 1987

都市の中世 五味文彦編 1992

もり人 まちづくり 丹波の森のころみ 丹波の森協会編 1993

都市再生 ロバート・B. グラッツ著 1993

生涯の家、共生の街づくり あなたはどこで老いを迎えますか 鎌田清子著 1992

新しい老後の住まい方と暮らし方 鎌田清子著 1986

世界のおもしろ住宅 松下電工コミュニケーションセンター 1993

自然科学ノート 近代および現代自然科学をめぐって 鈴木賢英著 1993

応用科学のための数学の基礎 中島博 [ほか] 著 1993

重力波天文学への招待 藤本真克著 1994

Cによる有限要素法のプログラミング 黒木健実 [ほか] 共著 1988

構造力学問題集 基礎的な演習問題をランク別に集録 赤木知之著 1988

有限要素法のノウハウ 東町高雄著 1993

構造力学プログラミング技法 BASICによる 塚本正文著 1987

アメニティ・デザイン ほんとうの環境づくり 進士五十八著 1992

まちづくり実践講座 育つ都市へ・参加と行動のシステム 高田昇著 1991

都市デザイン的手法 魅力あるまちづくりへの展開 鳴海邦碩 [ほか] 編 1989

時空のアトリエ 建築家の夢と現実 守屋弓男著 1993

景観からのまちづくり 鳴海邦碩編 1989

日本名建築写真選集 第1巻 1992 室生寺 土門拳撮影

首里城 琉球王府 ぎょうせい 1993

ボザール：その栄光と歴史 SD編集部編 1982

現代建築の50人 飯島洋一著 1993

ガウディ 芸術的・宗教的ヴィジョン R. デジャルヌ著 1993

マイコンによる構造解析プログラミング鋼構造物とコンクリート構造物 W.H. モスレイ著 1987

建築構造力学 図説・演習 1、2 中村恒善編著 1982

建築基礎 土を掘る技術と固める技術 建築技術 1992

建築設計事務所のマッキントッシュ活用法 MiniCad+ and more 青山哲夫著 1993

Macintosh desktop architecture guide Macで建築を考える MAD party 著 1992

豊かさへのマイルストーン ハイオーナーカー、ローレールの20年 グループCCR [編] 1988



気楽に読もう

「ウサギがはねてきた道」(科学選書 15)

川道武男 (紀伊国屋書店、1994.2)

夏休みに、この本を手にも然別湖へ出掛けた。ホテルと地元のネイチャリングセンターが主催する幾つかのツアーの中の「早朝ウォッチング」に参加した。6時半集合。湖畔にまた朝霧が立ち込める中、遊覧船で約40分、対岸の船着き場で降り、湖畔を巡る林道に分け入り、東雲湖(しのめこ)を目差した。その途中、「キチッ」という金属的な鋭い鳴き声が200m位先から聞こえた。間もな

く、火山の溶岩流が冷えてできた露岩帯に出た。双眼鏡を覗くと、警戒しているのか岩穴から頭だけ出して、鼻をぴくぴくさせていた。近付いて行くと、あと7m位の距離で、突然、身を翻して岩の隙間に姿を消してしまった。……著者は、北大生時代から「ナキウサギ属の比較研究」をテーマに、日高山脈を始め世界中の「ウサギが跳ねてきた道」を踏破してきた「ウサギ屋さん」です。あなたも一緒に、「ウサギ飛び」はいかがですか?

(T.S)

- 情報処理概論 山下敬彦著 1990
 アイルランドへ行(い)きたい 深谷哲夫[ほか]著 1994
 現代文明論としての哲学 中埜肇著 1988
 老子随想 三谷順一著 1994
 騎馬民族は来なかった 佐原真著 1993
 イギリス古事物語 加藤憲市著 1994
 アウシュヴィッツと表象の限界 ソール・フリードランダー編 1994
 南千島探検始末記 ワシリー・ブロウニン著 1994
 引き裂かれた忠誠心 第二次世界大戦中のカナダ人と日本人 飯野正子[ほか]著 1994
 情報処理概論 定道宏著 1988
 保険の社会学 医療・くらし・原発・戦争 本間照光編 1992
 老いはらう心の支度 樋下一郎著 1993
 人間教育を拓く 北海道の牧口常三郎 山崎長吉著 1989
 大学一変革の時代 天野郁夫著 1994
 危ない大学・消える大学 島野清志著 1993
 学生の政治・法意識の変化 北西允[ほか]著 1993
 アイヌ文化の基礎知識 アイヌ民族博物館監修 1993
 北海道の諸職―諸職関係民俗文化財調査報告書― 北海道教育委員会編 1993
 スーパーパソコンの時代 石田晴久著 1994
 生体の調節 長野敬著 1994
 ホタルの水、人の水 遊磨正秀著 1993
 インスリンの発見 マイケル・プリス著 1993
 ウサギがはねてきた道 川道武男著 1994
 ラムサール条約と日本の湿地 湿地の保護と共生への提言 山下弘文著 1993
 WordPerfect 5.2 Jハンドブック For Windows 河野春夫著 1994
 一太郎 Ver. 5 ハンドブック For Windows 沢辺恭一著 1994
 世界美術史 メアリー・ホリングスワース著 1994
 地球進化探訪記 松井孝典著 1994
 物語作家の技法 よみがえる子供時代 フェルナンド・サバテール[著] 1992
 日本の情景 ルポルタージュ 8 父よ母よ! 下 斎藤茂男著 1994
 (概説)現代政治 その動態と理論 五十嵐仁著 1993
 在日韓国・朝鮮人の就職差別と国籍条項 仲原良二著 1993
 東京市政と都市計画 明治大正期・東京の政治と行政 中 郵章著 1993
 国際組織の政治経済学 冷戦後の国際関係の枠組み 大芝亮著 1994
 人権論考 今村成和著 1994



前号(第16巻2号(130):1994.7.5)で2カ所の誤りがありましたのでご訂正下さい。

3 p(1)の図

		正	誤
昭和24~58年	和	167,208	171,733
	洋	71,720	67,195
合計	和	342,312	346,837
	洋	128,896	124,371

12p左側18行目

受信型技能 (productive skills)
 ↓
 receptive

物干し竿でバンブーダンス

二 通 信 子

8月17日はインドネシアの独立記念日である。毎年このころ札幌で「インドネシアと日本の交流の夕べ」が開かれている。留学生達が日頃お世話になっている日本人を招いて、自国の文化を紹介しながら共に楽しいひとときを過ごすという、手作りの楽しい会である。

以前インドネシアの留学生に日本語を教えたとき、授業でそれぞれの国の祝日が話題になったことがあった。インドネシアでは8月17日が独立記念日だと聞いて、何気なくその由来を尋ねた私は、自分のうかつさを心の中で恥じた。1945年8月17日、敗戦による日本軍の撤退の後に国の独立が宣言され、それが記念日として残っていたのだった。オランダとの戦いを経て本当の独立が実現したのは、さらにその4年後の12月であったという。

さてその「夕べ」、留学生は思い思いの色のパティックを着て、生き生きと動き回っている。学生達の歌や演奏、バリをはじめとしたいろいろな島や地方の風景や伝統文化を紹介するスライド、留学生の夫人達による華やかな民族衣装のショー、そして心を込めて準備してくれるインドネシア料理。多くの民族から成る国の、豊かな文化と奥行きを深さをしみじみと感じさせられる。

特に最初の年に見た「バンブーダンス(竹踊り)」は迫力満点だった。揃いの白いシャツに黒ズボン、そして赤い鉢巻きを締めた男子学生が周りの手拍子と掛け声に合わせて、仲間の動かす竹の上を交代で軽やかに飛び跳ねる。竹の開閉のリズムがだんだん速くなるにつれて、跳ぶ方の動きもどんどん速く力強くなる。もうこれ以上速く跳べない所まで行って、手拍子は大きな歓声に変わった。

その日彼等が歌った中に「インドネシア」という歌があった。それは皆にとって特別の思いのある歌なのだろう。全員姿勢を正し、まっすぐ前を見つめて歌う。学生達の、厳しいほどに真剣な顔をあのとき初めて見た。歌の中で「ああ、インド

ネシア」というフレーズが繰り返されていた。国の人々への彼らの熱い思いが伝わってくるようだった。

「バンブーダンス」といえば、私も一度だけ挑戦したことがある。同じ年の夏、彼等インドネシアの留学生と共に、苫小牧に住んでいた日本語の先生の家に遊びに行ったときだった。広い庭でバーベキューを楽しみすっかり子供に戻ってしまった私達は、庭のすみにあった物干し台から竿を引き抜いてバンブーダンスをやろうということになった。2本ずつを井桁の形に交差させ、その4本の竹の動きにうまく合わせて、足をはさまれないように前後左右に跳んで移動するのである。リズム感がある。さすがに本場の人にはかなわない。

夜札幌へ戻る車の中も遠足の帰りのように賑やかだった。私の右にはクリスチャンで太陽エネルギーの研究に来ているMさん。左にはイスラム教徒で原子力発電の研究をしているDさんとEさん。3人とも同じ寮で生活していて仲が良い。

私はDさんに「原子力発電は危ないというイメージがあるけど、こわくない？」とそっと聞いた。

Dさんは「大丈夫ですよ。」と笑った。

「今、日本で勉強しているシステムは安全です。(それよりも)今インドネシアでは電気がとても足りません。大きな都市では時々電気がストップします。私達の会社がインドネシアで初めての原子力発電所を作ります。私は早く帰って仕事をしたいんです。」—私はそれ以上何も言えなかった。

あれから4年、あのころのインドネシアの留学生も勉強や研究を終えて次々と帰国していった。いつも仲間同士助け合い、厳しい学習にもどこか心に余裕を持っていた彼等は、それぞれの場所で元気で頑張っていることだろう。あのスライドで見た豊かな風景を私もいつか訪れてみたい。

(岩波新書の『インドネシア—他民族国家の模索』、興味のある人にお薦めします)

(につう のぶこ 教養部講師)

雲南——日本の原風景

大江 敏 美

夏休みのせい、中国経済の活況の余波か、昆明（雲南省省都）の賑わいは札幌以上だ。空港には、36本の国内線、香港ほか東南アジア諸都市を結ぶ6本の国際線が開設されている。今日の昆明の繁栄の基礎は、日本の中国侵略の結果、北京大学その他から多くの人材、学術文献、産業などがここに疎開移動してきたことによるという。もちろん連合国が昆明の陸軍、空軍の基地を増強して対日戦を遂行してきたことも貢献している。現在の空港は当時の空軍基地が変身したもので、今や中国人、華僑、華人はもとより、欧米や日本からの観光客で空港ロビーはごったがえしている。ホテルも観光地も満員だ。

外貨獲得のため熱烈邁進中の中央と地方政府にとって、秘境探検的要素、天然の驚異、さらに独特な習俗、カラフルな民族衣装、エスニックな音楽と舞踊をもつ少数民族は絶大な観光資源だ。人口3400万の雲南省には中国の55の少数民族のうち26民族が居住し、その人口数は1000万人を超える。実は、2000年ほど前にここには滇（テン）という名の王国があったことが史記及び発掘調査から知られている。テン国の子孫はこれら少数民族のなかに生き続けているものと推察されている。最大の人口である300万を越えるのが彝族で、それはさらに30部族に細分される。そのなかのひとつサニ族は昆明の南東126キロの石林に住んでいる。その名のとおり石灰岩が侵食作用の結果巨木の林となり、天下の奇観を呈している。さて、昆明市内にある4大学のひとつは、学生数1500で少数民族の政治幹部の養成を目的として共産革命後に設立されたものである。

昆明（人口120万）は海拔1900mの高地にあるが、別名を「春城」とも「花城」（城は都市のこと）とも称されるように、年中気候温暖で住み易い。郊外は一面の稲で覆われており、稲田の中の小道を一行縦隊で進む子供達、草地で日向ぼっこする牛、山裾に肩をよせあう農家などの情景は、日本の原風景として強い郷愁を誘う。雲南省はまたコ

メのルーツのうちの一つとされる。納豆もそうだ。それだけではない。

中国のたいていの観光地には、外貨獲得の第一線ともいえる大規模高級土産物店がある。店員は英語などヨーロッパ諸語、日本語、朝鮮語などで対応でき、笑顔を撒きちらしその商売熱心さはさまざまにばかりだ。商品は、茶、書画（軸もの）、書道用具、七宝焼、玉器、^{ゲンツツ}段通（じゅうたん）、シルク製品、漢方薬に各地の特産物が加わる。昆明の特産物はただものではない。昆明南方の遺跡（石寨山；李家山）で出土したという青銅器の小品だ。これら遺跡では1956年以降発掘が続いているが、出土品のなかの金印「滇王之印」は、大きさ、デザインとも志賀島出土の金印「漢委奴国王」と似ており、いずれも漢の皇帝が下賜したものだ。同時に出土した青銅製の建物と群像などの彫刻のなかには日本の神社建築と古代人の生活様式などとの類似性をもつものがある。騎馬民族文明と農耕民族文明の重なりが中国平原を遠巻きに囲んだ三カ月型円弧にそって存在し、その両端が雲南省と倭のくにではないかという学説もある。

雲南省はその財政の半分を中央政府に依存しているとはいえ、中央の「3沿」開放開発戦略としての沿海岸、沿揚子江、沿国境に該当する重要拠点である。雲南省はベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接し、これら諸国のほか東南アジア各国との貿易量が増大している。昆明におけるハイテク産業、不動産、観光産業への国外（特に華人）からの投資も盛んになっている（中国日報商業週刊1994.7.31）。

しかし、問題がないわけではない。「ゴールデン・トライアングル」のラオス、ミャンマーからの阿片の密輸事件にふれて、7月31日付けの雲南日報は、1994年上半期の武装警察雲南国境警備総隊の検挙件数は710であったと報道としている。天は二物を与えずということか。

（おおえ としみ 教養部教授）

恋という名の木の葉を落とした

ワイマール晩秋記

冬じたくのドングリを拾うリスの動きが速い。
ゲーテの別荘の窓からそれが見える。

ワイマールの野はすっかり落葉していた。この
一帯はブナの森である。ブナをドイツ語で
Buche。本に当たる Buch はここに由来する。西方
のシュヴァルツヴァルト Schwarzwald(黒い森)
がヨーロッパトウヒの針葉樹林であるのに東方の
チューリンゲンの森がブナの広葉樹であるのは東
北の白神山地と同様だろう。

1823年の晩秋。時にゲーテ 74歳。

28歳になるポーランドのシマノフスカ夫人
ゲーテを訪問、彼女はピアニスト、歌手としてや
がてロシア皇后に仕える。

それはある晴れた小春日和 Altweiber-
Sommer(老母の夏)の日であった。

「おやおや、朝からワイン？ 有名なマリエン
バート悲恋。でも恋は行きつ戻りつですわ。雪が
降るまでお待ちあれ。」

「うん。でも、心臓に良いからね。フランス人に
心臓病が少ないのはこのためさ。一方、我がドイ
ツに胆石が少ないのは？」

「ビールでしょう。女はあまり飲まないから多い
そうですね。でも、これから行くロシアではウォ
ッカを飲むことになりそうですわ。」

「時に、昨夜の演奏会。トマシェクの『野バラ』
は絶品だよ。」

「でもあなたは どうして 48歳 違いのシューベル
トを理解せず、55歳も離れた 19歳の娘に恋をす
るんでしょうね。」

ゲーテは気まずそうに、ワインをぐっと飲んだ。

1816年、18歳で作曲した『野バラ』をシューベ

シ ユ ー ベル ト	③	ゲ ー テ こ と ほ ぎ や ま す	野 バ ラ 愛 し す み れ 想 い
------------------------	---	--	--

ルトは『魔王』と共にゲーテに献じたが、ゲーテ
はこれを見捨てた。若さの故か、ロマン派音楽の
不確定なリズムのせいかな。それともベートーベン
の後遺症なのか。ゲーテは当時、妻のクリスチアー
ネを失っていた。

「恋って、男の人にとってどんなものなんです
か？」

「そう、他の人が見出し得ない美を、ある時、
偶然に発見するってことかな。あのデモーニッ
シュな感情だよ。」

この「デモーニッシュな感情」こそゲーテが『野
バラ』を作詩した青春の恋で得たものだった。そ
の時愛した 18歳の娘は恋に敗れた。今度は 19歳
の娘にゲーテは敗れる。

「天才は青春を幾度も繰り返す」と言う。恋とい
う木の葉を幾度も落としては春を甦らせるゲーテ
とは「広葉樹型」人間そのものであったろう。

最初の「デモーニッシュ」は『ファウスト第 1
部』をうみ、今度は政務やら、社交やら、恋やら
で延び延びになっていた『ファウスト第 2 部』に
欠かせない力であった。

ゲーテが『ファウスト第 2 部』の急峻な峰へ挑
むのは 1825年、76歳。その時シューベルトは再び
ゲーテに曲を献じたが無視される。

ゲーテは脇目もふらず登っていたのだらう。

(M・K)

青春の泉にそいて

—『ゲーテ野バラ考』(坂西八郎編 岩崎美術社 1987年)

ゲーテにとってもシューベルトにとっても青春の記念碑となった『野バラ』。その作曲者はウェルナー
を含めて 88人。ベートーベン、シューマン、メンデルスゾーンと共にボヘミアの作曲家で教養人のトマ
シェクの顔もみえる。ゲーテは彼の人柄と作品を高く評価した。代表作『エクログ集(牧歌)』はモーツ
ァルトからシューベルトまでの音楽を抱括した。彼はボヘミアのシューベルトと言えり。

4 技能の同時強化：聴解力と読解力

小林 敏彦

今回は聴解力を中心に読解力との関係について詳細な学習法についてそのポイントを3点ほど述べたい。

まず第1に、聴解については読解の際に意味が認知できる語彙 (receptive vocabulary) が音声化した段階でもわかるようになること。すなわち、見てわかる単語は全て聞いた段階でもわかるようにすること。これには英語をたくさん聴いて英語の音声に慣れることが必要である。音に慣れるという行為は口語英語におけるイントネーション、リダクションについてある程度の知識が求められるのでその分野の本にあたるとよい。この認知できる語彙の増強 (ボキャビル) には英書や英字新聞雑誌を多読することが必要で、単語帳や語彙ノートを作成し分野別に整理をはかる。役所の名前、身体の部分の名称、病名などを項目ごとにまとめる。その際に必ず発音記号を添え、スペルだけでなく音読の練習もすることが大切である。更に語源から、接頭辞 (affix)、語根 (root)、接尾辞 (suffix) の知識を整理することや記憶の手助けとして連想記憶術や発音しながら紙にスペルを何度も書いてみるなどの工夫を凝らすことも大切だ。また覚えた単語はすぐ使うことが鉄則である。使う場面を待つのではなく、積極的に自分から使用場面を創設することが求められる。

第2に英語の語順に慣れることである。英文読解では左から右へ読み進むうちに、不明な点などはまた逆戻りして確認できるが、聴解の段階ではダイアログの場合は別として、放送などのモノログではできない。日頃より英文を読む時に左から右へ目を移動することに徹し、けっして逆戻りしないようにする。多少速度が落ちて構わないので、わかりづらい部分はゆっくりと一語ずつ左から右へ目を移動すること。この習慣が聴解の段階に轉移されて英語の語順で情報を処理し、英語的思考プロセスが習得されるようになる。また聴きながら一字一句心の中で和訳してはいけない。とても間に合わない。英語を英語で理解するということが部分的には可能なことである。英語の単語を確認できた時に、頭の中に日本語を介さずにその事象が浮かんでくるようにすることである。これは長い文になっても同じことで、そこで伝達されるメッセージ全体の概略を何となくわかる段階から、英語で自問自答し、自分のアイデアを日本語を介さず構築しディベートできるようになるには、最低でも英検1級ぐらい、

TOEFL 550点ぐらいの実力が必要である。この語順と速度を克服するには同時通訳者養成法にあるシャドウイング (shadowing) を一日30分行うと効果がある。これは毎週木曜日午後7時からLL教室1番で私が主催している通訳講座で毎回取り入れている方法なので興味ある方は問い合わせさせていただきたい。

第三に話されている内容について背景知識の量が聴解や読解に大きな影響を与えることを忘れてはならない。これは応用言語学の分野ではスキーマ理論 (schema theory) として日本でも研究が盛んに行われるようになってきた分野である。これは読む本の冊数で決まると言っても過言ではない。受験から解放された大学生は月に5冊は最低でも本を読むべきである。それも借りたりせずに、惜しまず身銭を切り、重要なところには印をつけるなどして完全に消化すべきである。また新聞も一日に2紙は全ページを読み切り、知的な人間との会話を毎日の日課に入れることが大切である。毎日同じ世代の気の合う者同士の交流からは、安心感は生まれても向上心と発展性が失われる危惧がある。

最後に、学習法で強調しておきたいのはインプットの重要性である。イングリッシュジャーナルでも、CNNでも、NHK英会話でもなんでもいいから手あたり次第一日2時間は集中的にテープを聴くこと。更に英字新聞を一日1時間読む (タイム、ニューズウィークは難解なので読まなくてもいい)。これを3年間一日も欠かさず実行すること。耳が痛くなくても耳鼻咽喉科で治療しながら続ける根性が必要である (実際に自身が大学1年の夏ごろ、耳に異常音を感じ頭痛と吐き気に悩まされた)。

上級を目指したい人はそれなりの時間の犠牲と集中力が必要なのだ。幼年時から英語に接する機会がなかった私を含めた大部分の日本人英語学習者は常識を超えた英語のインプットがなければ聴解力の養成は不可能である。特に英語教員を目指している学生は、自信を持って生徒指導できる実力を今のうちに身に付けるようにすべきであり、目標として英検1級、TOEFL 550点を卒業までに取得してほしい。今回は戦略的英語独習法の総括として外国人との効果的コミュニケーションについて。

(こばやし としひこ 人文学部講師)